

## 江戸極初期における下駄の変容

一六世紀末から一七世紀初頭において

今野春樹

はじめに

二〇〇〇〜〇一年にかけて行われた東京駅八重洲北口遺跡の発掘調査において、最終調査面である1期とその一段階上面である2期から、良好かつまとまった下駄が出土した。「東京駅八重洲北口遺跡調査会 二〇〇三」。

東京駅八重洲北口遺跡は名称の示す通り、東京駅八重洲北口の北側、新幹線ホームの直下に位置する。合計5期の生活面が確認され、その内2〜5期では小笠原家を初めとした大名上屋敷や南・北町奉行所の建物址、複雑に張り巡らされた上水遺構が検出し、1期では大名屋敷が営まれる以前の土地区画を目的とした溝や、東日本では初例となるキリシタン墓群が発掘された。本遺跡はかつての江戸前島の東端に位置し、1期の遺構は江戸初期に行われた土地造成以前の自然堆積層である湿地上に構築されている。1期

では一五九〇〜九九年に生産年代を求めうる大窯4期の陶器が出土し、2期では一六〇五年を生産年代の上限とする陶器が出土した。したがって1期の年代は一五九〇年を上限とし、かつ2期の年代上限である一六〇五年を下限とすることができる。この年代は徳川家康が関東に入府し、関ヶ原を経て本格的な全国支配とそれに連動した江戸の開発を始めた時期に相当する。

出土した下駄は年代的に江戸の極初期に属するものであるが、一見して江戸後半期の下駄とは形状が大きく異なることが判る。出土した陶器の生産年代が一六一〇年代であり、江戸期の遺構としては最古級とされる丸の内三丁目五二号土坑出土の下駄と比較しても全体の様子が大きく異なっている。東京駅八重洲北口遺跡出土下駄の様相がそれ以降の年代に属する遺跡出土の下駄と異なる原因は一体なにか。

この命題を起点として、中世から江戸へ移り変わる時期の下駄の様相について、東京駅八重洲北口遺跡出土の下駄と、同遺跡に時代的・地理的に近接する遺跡出土の下駄とを対比しながら、その変容の原因について解答を導き出してみたい。

なお筆者は東京駅八重洲北口遺跡の調査に参加し、その報告書において出土した下駄について考察としてまとめた。本稿はその考察に大幅な増補を加えたものである。また同遺跡の詳細に関しては既刊の報告書を参照されたい。

## 一、研究簡史

まず本論に入る前に、簡単ではあるが主なものに限って、下駄研究の軌跡について振り返ってみたい。

下駄全般についての考古学的見地からの研究は少なく、主に民俗学的見地からの研究が行われてきた。江戸期の下駄を単独の題材とした研究としては、宮本馨太郎氏による「露卯下駄の終焉」〔宮本一九六一〕が先駆の一つとしてあげられる。この中で宮本氏は露卯下駄について、文献資料中に散見される記述や福岡・岩手・千葉・東京各地で出土した資料を逐次とりあげて、その終焉時期を検証した。結論として、露卯下駄は江戸末期まで広く着用され、明治以降は陰

卯下駄に取って代われるが、露卯下駄の使用例としては昭和九（一九三四）年に鹿児島県大島郡十島村宝島で確認された例をもって、露卯下駄使用の最終とした。この論考の反響は大きく、各地から露卯下駄発見の報告が宮本氏のもとに寄せられた。

各地の報告によって得られた新資料を加えた「露卯下駄の大きさ」〔宮本一九六三〕では、露卯下駄の大きさに着目して、年代的傾向についての検証がなされた。中世から江戸期にかけての露卯下駄について台長・台幅・台厚・全高・歯高・歯幅・歯厚の項目を設けて計測した結果、「台長と台幅とが相伴って大きく且つ台厚が極端に大きいか小さい下駄は技術的に早い時代のもの、これに対して台長と台幅とが相伴って小さく且つ台厚が極端に大きいとか小さいとかというようなことの認められない下駄は技術的に後の時代のもの」という傾向を見出し、さらに「東京地区の下駄が台長と台幅とが相伴って小さく、且つ台厚の極端な大小・変化が認められないのは露卯下駄の製作技術が安定していた」として、東京地区つまり江戸において露卯下駄の製作技術が確立したと結論付けた。

宮本氏の研究は下駄研究の方法論を明確にし、その可能性を示唆するものであり、以後の研究に非常に大きな影響を与えた。研究各誌には富山県「高瀬一九六九」、東京・銀

座「岸上一九六九」、東京・葛西城「宍戸一九七四」と各地の露卯下駄に関する資料紹介が掲載され、一九七〇年代に入ると露卯下駄だけでなく、鎌倉市の連齒下駄についても報告されるようになり「赤星一九七二」、次第に下駄への関心が高まってきた。このように露卯下駄を初めとして下駄の研究は始まったが、類例が少なく、対象とされる器種が露卯と連齒下駄に限定されていたため基礎的な研究に留まり、下駄全般に対しての形式分類、編年などの体系的研究にまでは発展しなかった。

一九七五年、東京都千代田区の都立一橋高校内で行われた発掘調査は江戸期の遺跡を対象とし、従来の日本考古学の範疇にない江戸考古学という新分野を開く画期的なものであった「都立一橋高校内遺跡調査団一九七六」。一橋高校調査の内容についてはあらためて述べる必要はないと考えるが、この遺跡は江戸時代のほぼ全期間を包含しており、その中から総計二〇〇点以上の下駄類が出土した。古泉弘氏は出土した下駄のうち約一五〇点を対象として、文献資料に見られる下駄の記録をも交えながら、一〇種類からなる分類を試みた「古泉一九七九」。下駄の本格的な分類はこれが初めてであり、江戸期の下駄研究において一定の概念を確立し、その分類は以後の下駄研究において基本的に踏襲される画期的な研究となった。古泉氏の発表した下駄

の分類に対しては、早くも翌年に潮田鉄雄氏によって、民俗・民具・風俗的見地や下駄職人の立場から懐疑的意見が投げかけられた「潮田一九八〇」。これに対して古泉氏は補足説明を行い、一時期、考古学と民俗学の間において議論が活発化した「古泉一九八二」。しかし以後は考古学と民俗学双方の研究成果を積極的に融合するかたちで有機的に研究が進められ、江戸期における下駄の実態が立体的に解明されて行く。

一九八〇年代以降は激増する発掘調査に比例して下駄の類例が増加し、研究全体としては形式分類がその中心テーマとして展開していくが、一部では具体的年代を示した編年も行われるようになる。

## 二、下駄の分類と新採用の名称について

このように江戸の下駄についての取り組みは宮本氏の研究を受け、一橋高校の調査を契機に本格的に始まったが、江戸期における下駄研究の最大の関門は江戸後半期において爆発的に増える器種への対処であろう。分類においても、下駄の数だけ類例があると言っても過言ではない状況であり、江戸時代を通じて見た場合、その種類は膨大な数となる。江戸遺跡出土下駄の本格的な分類は先述したが、古泉弘

氏によって、一九七五年に調査の行われた都立一橋高校出土の資料を中心として、各器種・器形ごとにⅠ～Ⅴ類にわたる一〇種に分類がなされた「古泉 一九七九」。まず古泉氏は、下駄を連歯下駄のように原木を切るか削るなどするだけで製作上接合過程を有さない種類と、露卯・陰卯下駄のように台と歯を別個に作り分け、両者を接合させた種類とに大別し、さらに形態上の特徴から、Ⅰ類連歯下駄、Ⅱ類削り下駄、Ⅲ類露卯下駄、Ⅳ類陰卯下駄、Ⅴ類無眼下駄に分類した。この分類概念は、以後の下駄研究において分類の基礎として踏襲されていく。

また市田京子氏は大きくⅠ…一木から台と歯を切り出した連歯下駄、Ⅱ…一木作りで歯を持たない無歯下駄、Ⅲ別材で作った台と歯を組み合わせた差歯下駄に大別し、さらにこの三種類を二〇種に細分化を試みている「市田 一九九二、二〇〇〇」。しかし個々の下駄の形状的特徴を踏まえての細分化ではあるが、複雑化し、分類によって得られる下駄の系統だった器形の変化を把握するには若干の困難さを感じる。また文献資料に記載される下駄とその呼称をあげて、十五世紀後半から十九世紀代の下駄について年代的変遷を図化して説明しているのが興味深い。ただ問題として、文献資料中に描かれる下駄の挿図が正確にその下駄の形状を描写しているかどうか、また著作中に挿入される表をみ

ると下駄の形態変化の推移が全国的に一斉であったかのような印象を受けるが、実際はどのようなものであったのか、地域的傾向があった場合その様子はどのようなものであったのか等、解決しなければならぬ問題が多いように思われる。

一九九五年に調査が行われた溜池遺跡では、大量に出土した資料について西山博章氏が新たに確認された形態のものも含めてⅠ～Ⅷ類二六種に分類している「都内遺跡調査会 一九九六」。この分類は古泉氏の分類に基づいたものであり、膨大な種類を数えるものとなった。結果的に連歯下駄、露卯下駄、陰卯下駄の出現・盛行時期について、調査では一七世紀後葉以前の資料が存在しなかったとする一方、連歯下駄は一七世紀後葉にかなり普及してそのピークは一八世紀中葉であり、露卯下駄は一七世紀後葉に多く、以後徐々に減少して一八世紀末には僅かになる。特にその減少割合は、一八世紀中葉から後葉にかけて急激であるとしている。陰卯下駄は一八世紀以降徐々に増加し、幕末頃には普及度合が連歯下駄と同じくらいになり、その時期は一橋高校の場合よりも若干早い時期が想定されるとしている。また露卯下駄との普及度合の逆転現象は一八世紀中葉から後葉にかけてであって、比較的緩やかであった等、新たな見解を導き出すことに成功した。

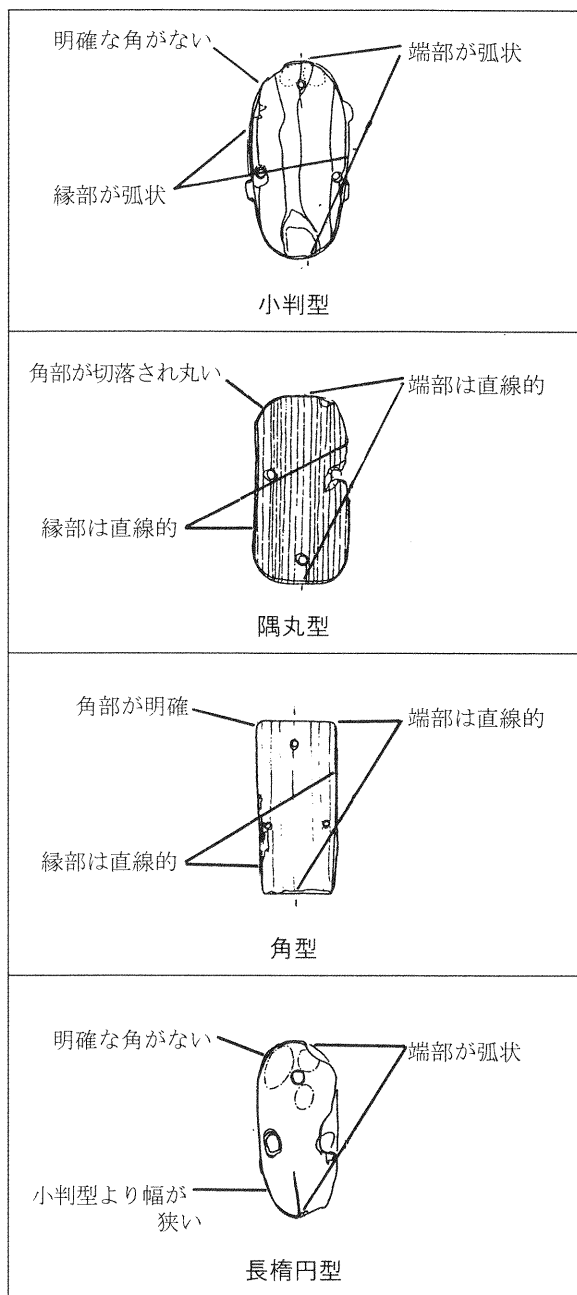


図1 分類概念図

一九七七〜七八年に行われた小石川牛天神下の調査において出土した下駄の分類では、古泉氏がかつて試みた分類に新たな概念を追加している。「都内遺跡調査会二〇〇〇」。基本的な分類方法は同じであるが、各型において「角型」「丸型」と言う単純な形状を表す名称を用いている。このように各氏の懸命な努力によって、下駄の分類研究

は確実な進歩を見せている。しかし以上の分類は一七世紀後半以降の下駄を対象としており、本稿でとりあげる江戸の極初期に属する八重洲北口遺跡出土下駄について分類を考えるには少々適合しない部分があるように感じられる。用途を加味した分類の細分化により下駄の種類が非常に増えたため、考え方によっては複数以上の類例と適合する場

### 江戸極初期における下駄の変容（今野）

合が生じ、かえって視点が定まりにくくなったからである。そこで筆者は下駄の形状の変化を捉え易くするため、敢えてこれまでの分類において用いられてきた概念や分類方法を用いず、観点を単純化・整理して下駄の分類を試みた。それは下駄の種類やそこから派生する機能・用途を二義的要素として、下駄の上から見た平面形を主体として分類するものである。こうして平面形のみで視点を絞ることによって、年代経過に伴う下駄の変化の様子が把握し易くなった。そしてその表現方法においては数字・アルファベット等を用いて略号化せず、形状を具体的に把握できるように、その形状を端的に表現する「小判型・隅丸型・角型・長楕円型」の四つの名称を採用した（図1）。この分類概念は、下駄の種類が急増する江戸後半期においては対応することができないという欠点を有するが、比較的下駄の種類が少ない中世から江戸初期においては有効であると考えられる。

各型の分類の目安となる特徴としては、小判型は平面形において角部がなく、端部・縁部が弧状を呈し、全体的に丸い形状であり、小判に似ることから命名した。隅丸型の角部は小判型よりも張り出すが、切り落とされたように丸く、端部はやや弧状を呈するが直線であり、縁部も直線的である。角型は角部が明確に形成され、端部と縁部は直線的である。長楕円型は小判型と同様に明確な角部が存在せず、端部も弧状である。しかし小判型と異なり縁部は比

較的直線的であり、また小判型よりも幅が狭く、細長い平面形を呈している。

以上が本稿で用いる分類の基本的概念であり、次にこの分類に沿って、八重洲北口遺跡とその周辺遺跡出土の下駄について検証してみたい。

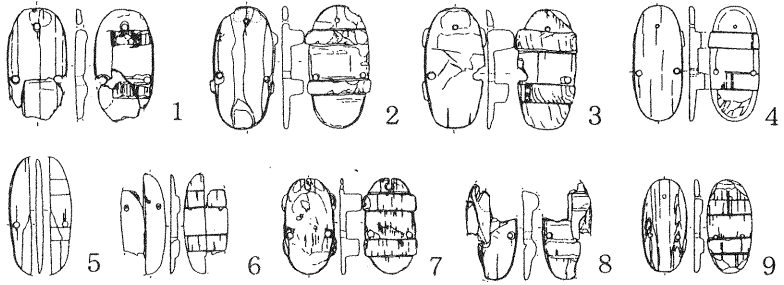
### 三、東京駅八重洲北口遺跡の周辺遺跡出土の下駄

（家康入府以前）

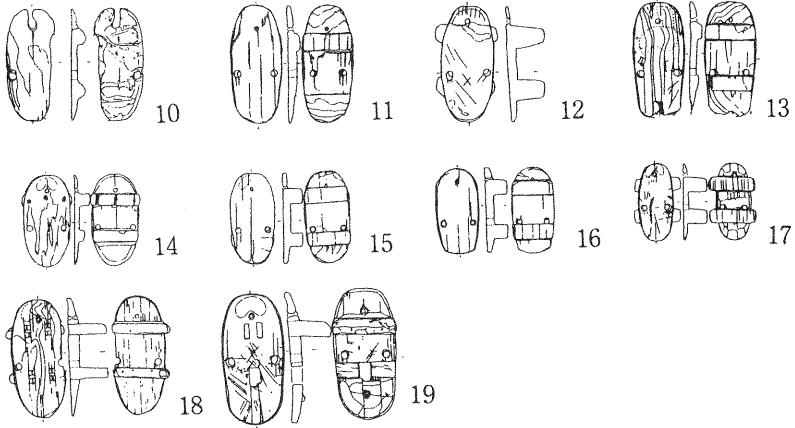
東京駅八重洲北口遺跡の周辺において地理的、年代的に近接する遺跡の調査例は非常に少なく、鎌倉、葛西城、小田原地域における一連の調査があるのみである。以下において各地域において年代的にも把握し易く、かつ一括した資料が出土した調査例を選択し、年代の古い順に下駄の推移について、東京駅八重洲北口遺跡出土の下駄に触れる前に見ておきたい。

#### 鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群

一九八七年に第一次調査が行われた鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群（神奈川県鎌倉市）は、JR鎌倉駅と若宮大路に挟まれた場所に位置する「若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 一九九六」調査で確認された三時期の生活面からは、良好な



第三面 (12 世紀第 4 四半期～13 世紀第 1 四半期)



第二面 (13 世紀第 2 四半期～第 3 四半期)



第一面 (14 世紀第 1 四半期～第 2 四半期)

図 2 若宮大路周辺遺跡群 1 次調査出土下駄  
(若宮大路周辺遺跡発掘調査団 1999)

## 江戸極初期における下駄の変容（今野）

状態の一括資料が出土している（図2）。下駄の種類としては連歯下駄と露卵下駄のみの出土であるが、各時期においてその形状、特に上から見た際の平面形に変化が現れる。

第三面の年代は一二世紀第4四半期から一三世紀第1四半期に相当する。この面出土の下駄の特徴としては、出土したすべての下駄が連歯・露卵の別なく、その平面形において明確な角部が形成されず、端部・縁部が弧状を呈した小判型である。

第二面は一三世紀第2四半期から第3四半期に相当する。この時期の下駄の平面形は概ね第三面と同様に小判型を呈するが、多少前後に長形化する傾向が見られる。13・19は端部が完全な弧状ではなく、僅かではあるが角部が生じ、隅丸型に近い。この2点を隅丸型としたい。第一面は一四世紀第1四半期から第2四半期に相当するが、明確にこの時期としうる下駄としては、20の1点のみの報告となっている。敢えてその形状を前の2段階と比較してみると、その平面形は角部があたかも切り落とされた様に丸いものの、隅丸型である第二面の13・19よりも明確な角部が形成され、さらに端部と縁部は弧状ではなく、直線的に変化している。その平面形は完全な隅丸型と表現した方が適切な形状である。

若宮大路周辺遺跡第一次調査出土の下駄の年代経過に伴

う形状の変化を概観すると、第三面ではすべての下駄が小判型であるが、続く第二面では小判型の性格を遺した隅丸型（13・19）が現れ、最新の第一面ではより完全な隅丸型（20）へと変化している。つまり年代が下るにつれて、連歯下駄・露卵下駄ともに、一部では小判型から隅丸型に変化する様子が見て取れるのである。

## 葛西城址

一九七二年から現在に至るまで、断続的に葛西城（東京都葛飾区）とその付属施設について調査が行われている。遺構・遺物の年代が明確且つ一括した資料として、北条期（二五三〇～九〇年）の濠とされるIV区濠系統「葛西城址調査会一九七四・一九七五・一九七六・一九八三、葛飾区遺跡調査会二〇〇一」と、一九八七年に調査された青戸七三〇地点「葛飾区遺跡調査会一九八九」において確認された、一六世紀中葉代に比定できる各遺構出土の下駄がある。まずIV区濠系統出土の下駄としては、年代幅が広いためであろうか、平面形は多様である（図3）。1・2は小判型・連歯下駄であり、端部は弧状、縁部が直線的で、角部は丸く、小判型と隅丸型の両方の要素が見られる。3～9は隅丸型・連歯下駄であり、端部・縁部が直線的で角部が丸いなどの特徴を示している。10～12は連歯下駄であり、角部が



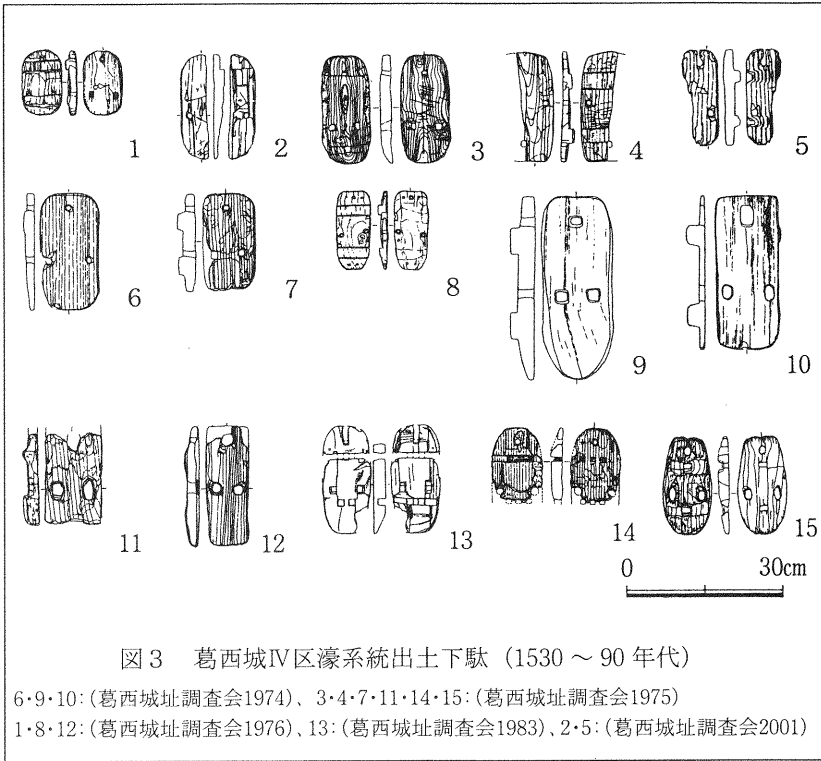


図3 葛西城IV区濠系統出土下駄 (1530～90年代)

6・9・10: (葛西城址調査会1974)、3・4・7・11・14・15: (葛西城址調査会1975)

1・8・12: (葛西城址調査会1976)、13: (葛西城址調査会1983)、2・5: (葛西城址調査会2001)

明確に造られ、完全な角型とすることができ。13・15は隅丸型・露卯下駄である。いずれも角部が小判型と同程度に丸いが、端部と縁部が弧状を呈するものの若干直線的であり、平面形全体を見ても小判型よりも隅丸型に近い印象を受ける。特に13は若宮大路周辺遺跡第一次調査の13(図2)と形状が類似する。

青戸七―三〇地点における各遺構から検出された下駄は、遺構の年代が一六世紀中葉代とまとまっていることから、形状において全体的にIV区濠系統出土の下駄よりもまとまりがある(図4)。

1は小判型の連歯下駄、2・3は隅丸型の連歯下駄である。角部と端部に特徴が見られる。4は角型・連歯下駄であり、角部が2・3の隅丸型と大きく異なる。7は踵部分が大きく抉られていることから、隅丸型の削り下駄と考えられる。8・9は小判型の露卯下駄である。同じ小判型でも鎌倉・若宮大路周辺遺跡第一次調査出土の下駄と比較してみると、8・9の幅が第三面の小判型よりも若干狭く、むしろ形状の全体が第二面のものに近いようである。

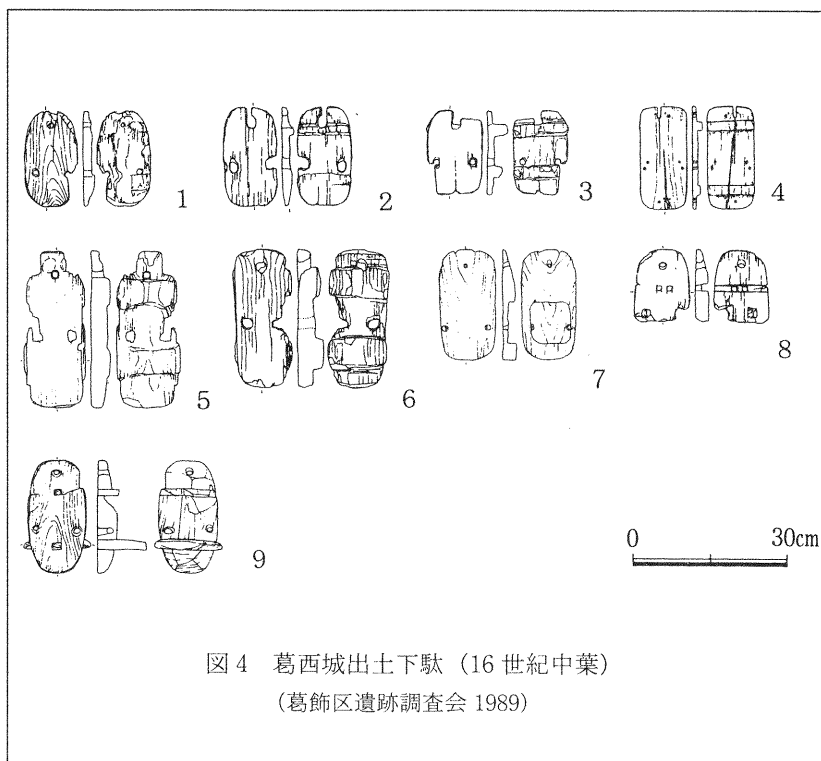


図4 葛西城出土下駄（16世紀中葉）  
（葛飾区遺跡調査会 1989）

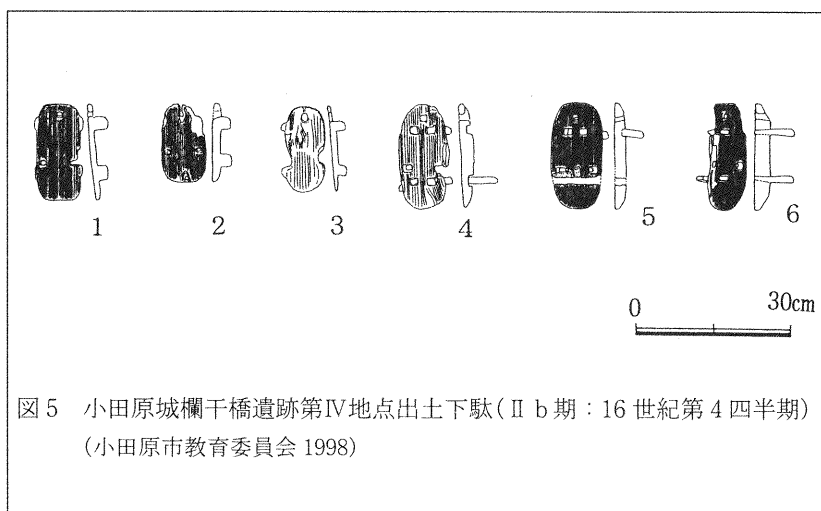


図5 小田原城欄干橋遺跡第IV地点出土下駄（Ⅱb期：16世紀第4四半期）  
（小田原市教育委員会 1998）

#### 小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点

小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点（神奈川県小田原市）の調査では小田原編年でⅡb期（一六世紀第4四半期）に属する三一三号、三二九号、三三六号の三遺構から六点の出土が見られた「小田原市教育委員会一九九八」。遺構の性格は三一三・三三六号が土坑、三二九号が石組である（図5）。1～3は連歯下駄であり、形状は隅丸型である。4～6は小判型・露卵下駄であり、若宮大路周辺遺跡群と比較すると葛西城と同様に幅の狭い、やや細長い傾向が見られる。角型下駄の出土は見られない。

若宮大路周辺遺跡群と葛西城はともに中世にあたる年代に属する遺跡であるが、両遺跡出土の下駄において、時間経過に伴う器形の変化を見出すことができる。まず連歯下駄では若宮大路周辺遺跡群第三面が全て小判型ではあるが、第二面では小判型と隅丸型の中間の特徴を有する下駄（図2・13）が登場し、第一面では完全な隅丸型（図2・20）が現れる。多少時間が空くが、葛西城において一六世紀中葉にあたる青戸七―三〇地点の遺構出土の連歯下駄では小判型が減少し、変わって隅丸型が主体を占め、新たに角型が登場する。一方露卵下駄は若宮大路周辺遺跡と葛西城ともに小判型のみ出土であるが、両者間では葛西城出土の小判

型・露卵下駄の幅が狭く、細長く変化する傾向を見出すことができる。

この傾向をもって小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点出土の下駄をあらためて観察すると、連歯下駄では隅丸型のみ出土であり、露卵下駄では葛西城に形が類似する、やや幅が細めの小判型である。小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点で下駄を出土した遺構の年代は小田原編年Ⅱb期（一六世紀第4四半期）であるが、連歯下駄と露卵下駄の特徴から下駄を出土した遺構の年代は、類例が少ないが敢えて判断すると、一六世紀第4四半期でも家康入府以前で、豊臣秀吉による小田原城落城までの一五七五―一五八九年の間とすることができよう。

このように若宮大路周辺遺跡群、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点を例にとると、一二世紀後葉から一六世紀後葉間において連歯下駄は小判型↓隅丸型↓角型へと順次出現し、次第に角部が形成される方向に変化する。露卵下駄は小判型が踏襲され、形状に大きな変化は見られないが、ゆつくりとした小変化として、下駄の幅が狭くなる傾向が現れることが明らかとなった。

#### 四、東京駅八重洲北口遺跡の周辺遺跡出土の下駄

（家康入府以後）

一五九〇年、豊臣秀吉による北条氏討伐が終了し、同年、徳川家康が関東へ入府し、江戸に本拠地を定める。この時期に相当する遺跡の調査例としては、丸の内三丁目遺跡、そして東京駅八重洲北口遺跡がある。これらの遺跡は家康入府後間もない時期の遺跡とすることができる。

##### 丸の内三丁目遺跡

丸の内三丁目遺跡（東京都千代田区）では五二号土坑から良好で大量の下駄が出土している（図6）。五二号土坑の年代は共伴する陶磁土器の生産年代から一六一〇年代とされている〔東京都埋蔵文化財センター一九九四〕。

1は隅丸型・連歯下駄であるが、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点出土の隅丸型・連歯下駄よりも多少幅が狭いようである。2も分類上では隅丸型・連歯下駄としたが、前部は1と同じ丸い角部、直線的な端部など隅丸型の特徴を備えているものの、後部は大きく異なり、角部が消失し、端部が突出した弧状を呈している。3はさらに前部において角部が消失し、端部が突出した弧状を見せる。後部の端部は2の後部と同様な形状を示し、隅丸型とは全く

異なる特徴を有している。この特徴を有した下駄は若宮大路周辺遺跡群、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点には存在しないため、新たにその平面形の様子から長楕円型とした。したがって2は1の隅丸型と3の長楕円型の両方の性格を有していることとなる。4～10は角型・連歯下駄であり、隅丸型・連歯下駄（1）と同様に葛西城出土下駄に比べ、やや幅が狭くなる傾向がある。11は刳り下駄であるが、その形状は2と酷似しているため、隅丸型とした。12はマエツボが挟られていることから、角型・刳り下駄とした。13は平面形が2・11と類似することから隅丸型・露卯下駄とした。14は露卯下駄であるが、平面形は3と同じ長楕円型である。15は露卯下駄ではあるが、角型である。五二号土坑出土下駄の全体的特徴として、連歯下駄は隅丸型に代わって角型が主流を占める。この傾向は連歯下駄に限らず、刳り下駄（12）、露卯下駄（15）にも角型が登場する。小判型、隅丸型、そして角型へと連歯下駄は形状を変化させたが、刳り下駄、露卯下駄において同様な現象が生じたことが予想される。また五二号土坑出土下駄において最も顕著な特徴として、連歯下駄、刳り下駄、露卯下駄において長楕円型が新たに出現したことである。ここで問題となるのは若宮大路周辺遺跡、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点では長楕円型が一点も出土していないこと

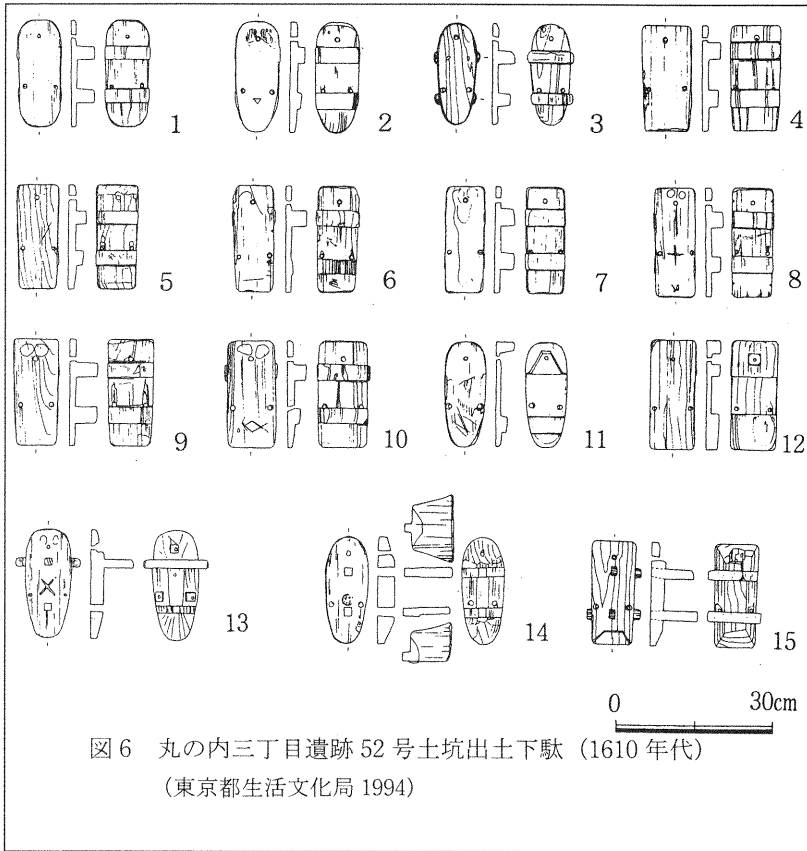


図6 丸の内三丁目遺跡 52号土坑出土下駄 (1610年代)  
(東京都生活文化局 1994)

である。この長楕円型は五二号土坑より年代的に古い八重洲北口遺跡においても出土している。ここで少し時間を戻して、東京駅八重洲北口遺跡の下駄について検証してみたい。

#### 東京駅八重洲北口遺跡

東京駅八重洲北口遺跡(東京都千代田区)では、1期(一五九〇～一六〇五年)のS一二二八、一三五五、一四〇一、一四〇二出土の六点と、その上面である2期で同伴陶器から一六〇五～一〇年代前半の遺構と判断されるS一二六四出土の二点を加えた合計八点について説明してみたい(図7)。

小判型としては1の連歯下駄のみである。隅丸型としては2の刳り下駄のみである。角型は3・7の刳り下駄がある。4は無眼下駄、草履下駄と呼称されるもので、現代の靴底のような形状を呈しており、どの型に該当するか決めかねる。5・6は共通して長楕円

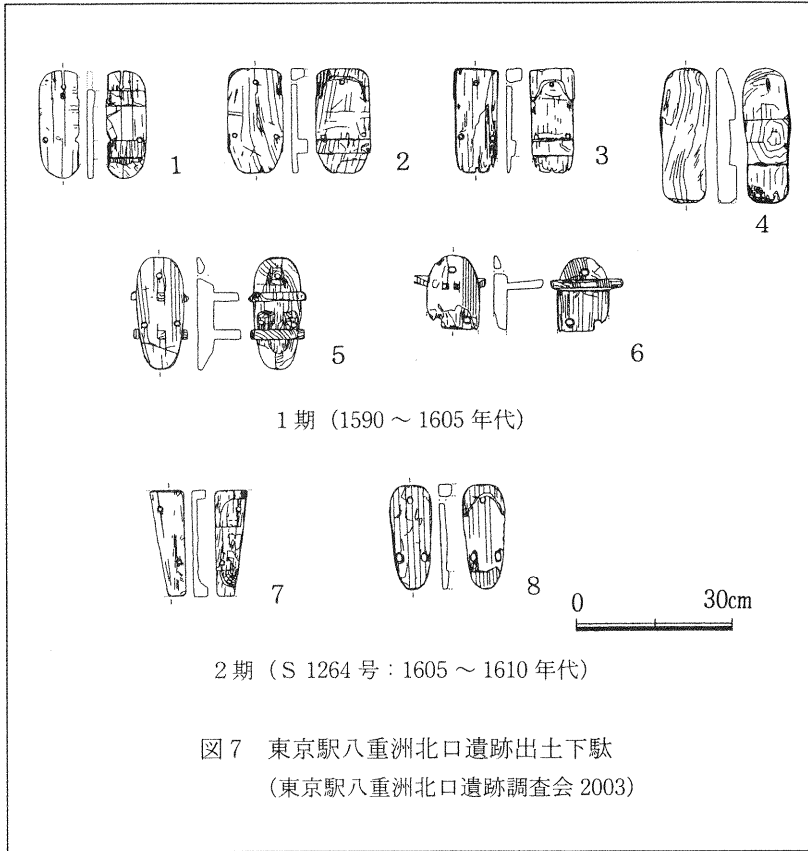


図7 東京駅八重洲北口遺跡出土下駄  
(東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003)

型に分類され、ともに露卯下駄である。8は丸の内三丁目遺跡五二号土坑出土の図6―2・11・13と同じ特徴を有することから、偶丸型・割り下駄としたい。東京駅八重洲北口遺跡においても小判型、偶丸型が減少し、連歯下駄、割り下駄において角型が主流を占める傾向が見られる。また長楕円型は丸の内三丁目遺跡五二号土坑と同様に連歯下駄、割り下駄、露卯下駄において出現し、一七世紀初頭において長楕円型の出現が顕著になる。また丸の内三丁目遺跡五二号土坑の図6―2・11・13と東京駅八重洲北口遺跡の図7―8は前部の角部が丸く、突出した後部は弧状を呈し、他の偶丸型とは異なった特徴を有する。特に後部は長楕円型の後部に類似しており、偶丸型と長楕円型の中間的性格として見る事ができる。ともに年代は一六一〇年代と揃っている。

丸の内三丁目遺跡、東京駅八重洲北口遺跡とそれに先行する若宮大路周辺遺跡群、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点の形状変化の様子を通観してみると、連歯下駄が小判型↓隅丸型↓角型へと変化の様子がより鮮明になり、他種下駄の角型への変化の傾向は丸の内三丁目遺跡五二号土坑の露卯下駄にも現れる。また割り下駄は一六世紀中においては隅丸型から角型へ変化している様子が葛西城と東京駅八重洲北口遺跡において追跡できる。以上が中世から近世にかけて関東における下駄の器形変化の変遷として捉えるものである。

さらに、中世三遺跡と丸の内三丁目遺跡、東京駅八重洲北口遺跡が決定的に異なる点は、長楕円型が突然に登場することである。長楕円型は若宮大路周辺遺跡群、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第Ⅳ地点においては全く出土例がないのに対して、一五九〇年を年代の上限とする東京駅八重洲北口遺跡Ⅰ期において突然、露卯下駄(図7-16)に現れる。東京駅八重洲北口遺跡における長楕円型がここだけに限られた突発的出現でない証拠として、これに年代的に続く丸の内三丁目遺跡五二号土坑においても、連歯下駄(図6-13)と露卯下駄(図6-14)に長楕円型が見られることから明らかである。

長楕円型は先述した中世から近世にかけて下駄の器形変

化の系譜に乗らず、その出現時期は葛西城と八重洲北口遺跡の例を考慮すると、一六世紀末であることが容易に想像できる。筆者はこの長楕円型の突然的出現の大きな要因の一つに、この時期のある歴史的事象が関係すると考える。それは一五九〇年の徳川家康の江戸への入府である。家康の入府に伴い長楕円型も江戸へ流入したと仮定することはできないであろうか。それを確かめるべく、ここで家康が江戸へ入府する前後で家康の本拠地であった東海地域の二遺跡出土の下駄について検証してみたい。

## 五、東海地域の下駄

年代が家康江戸入府(一五九〇年)前後の下駄を出土する東海地域の遺跡としては、清洲城下町と駿府城の調査例がある。

### 清洲城下町遺跡(Ⅱ)

清洲城下町遺跡(愛知県西春日井郡清洲町)の調査は一九八三〜八六年にかけて行われ、SD六六から良好な一括資料が出土した(図8)。遺構の性格は塀のような施設と並行する溝である。1〜4は連歯下駄であるが、1・3・4は隅丸型、2は長楕円型である。また5〜12は露卯下駄

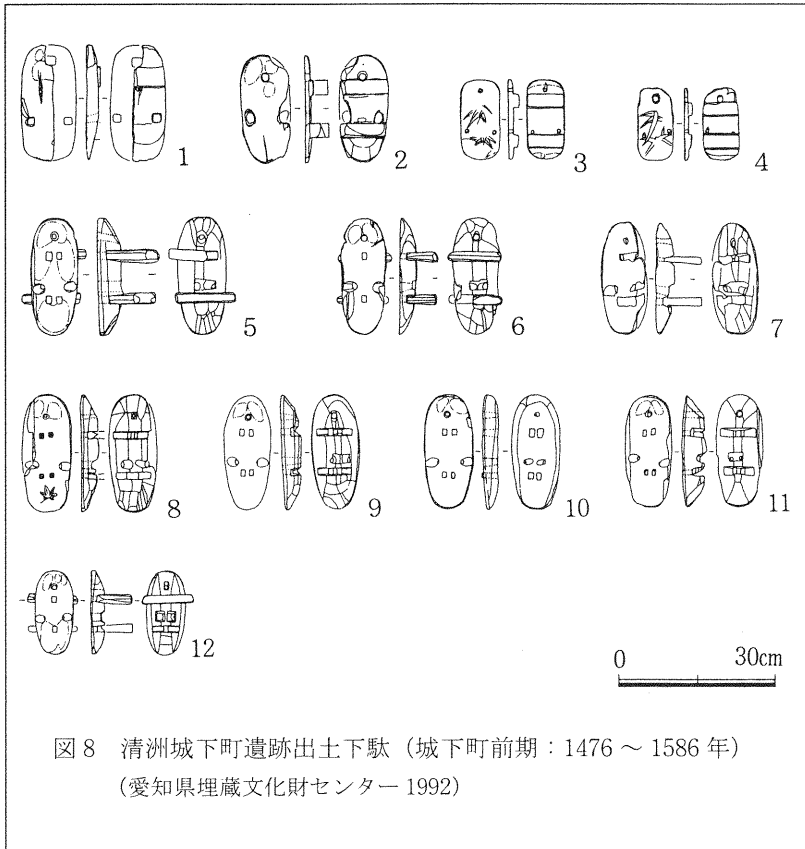


図8 清洲城下町遺跡出土下駄（城下町前期：1476～1586年）  
（愛知県埋蔵文化財センター1992）

であるが、すべて長楕円型である。  
清洲城は一五八二年に織田信長が本能寺において倒れるまでの信長の居城であり、また信長が安土城に移って以後は信忠の居城であった。SD六六の年代は城下町前期（二四七六～一五八六年）とされ「愛知県埋蔵文化財センター一九九二」、これはほぼ若宮大路周辺遺跡群、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第IV地点と並行する年代である。清洲城下町遺跡SD六六出土の下駄をこの三箇所出土の下駄と比較すると、双方の下駄の形状が全く異なる様相を見せることは一目瞭然である。並行する時期に関東三箇所遺跡・遺構において長楕円型の下駄が出現していないにもかかわらず、東海地域の清洲城下町遺跡においては小判型、偶丸型が僅かに見られるが、それよりも長楕円型が圧倒的に多く出土しているのである。つまり長楕円型が関東地域では一六世紀末にならないと出現しないにもか



わらず、清洲城下町遺跡では先行して長楕円型が出現し、しかも盛行しているような状況を呈しているのである。さらに東海地域における例として、家康の居城であった駿府城出土の下駄について見てみたい。

### 駿府城跡

駿府城（静岡県静岡市）の調査は本丸堀部分が一九〇〇年、二の丸水路部分が一九二二年に調査され「静岡県教育委員会一九九八」、この時本丸堀と二の丸水路より下駄が出土している（図9）。

1～5は連歯下駄であるが、1は隅丸型、2・3は角型、4・5は長楕円型である。6・7は長楕円型・剝り下駄である。駿府城出土下駄の傾向としては、長楕円型が主体を占めるようである。

本丸堀と二の丸水路の構築時期について、報告書では明確にされていない。しかし駿府城は家康が最初に居城とした一五八五年と隠居した一六〇七年の二度にわたって、大きな修築を受けている。家康が入城する以前は今川氏の居館があったとされ、本丸堀と二の丸水路が総石垣積みの堅牢な造りであることから、両所の構築時期は家康が居城とした一五八五年、もしくは一六〇七年であることが予想される。つまり本丸堀と二の丸水路から出土した下駄の年代

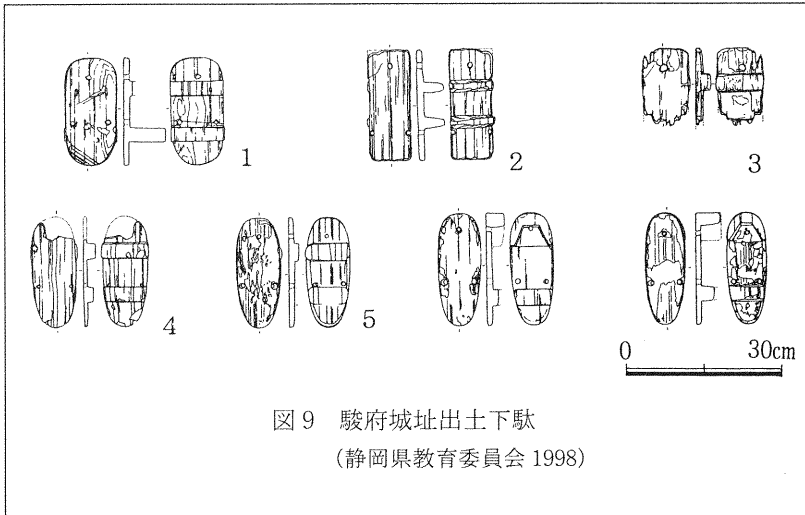


図9 駿府城址出土下駄  
（静岡県教育委員会 1998）

## 江戸極初期における下駄の変容（今野）

上限は、東京駅八重洲北口遺跡出土下駄よりも古いことになる。

駿府城出土の長楕円型・削り下駄6・7は丸の内三丁目遺跡五二号土坑の図6-11と、また長楕円型・連歯下駄5は同五二号土坑の図6-3と形状が酷似している。先述したが、清洲城下町遺跡において長楕円型の下駄が東京駅八重洲北口遺跡に先行して出土している状況を考慮すると、類似する形状であっても、駿府城出土の下駄の方が丸の内三丁目遺跡五二号土坑よりも古い年代を示すと考えることができる。

## まとめ

このように東海地域の両城は、年代上は東京駅八重洲北口遺跡、丸の内三丁目遺跡五二号土坑より古いにもかかわらず、すでに大量の長楕円型の下駄が出土している。しかもほぼ同時期である鎌倉若宮大路遺跡群、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第IV地点の出土下駄には、長楕円型は一切見られない。また長楕円型下駄が東海地域以外から流入した可能性も否定できない。東海地域ばかりでなく、甲信越地域や東北地域と江戸を結ぶ交通ルートも存在したからである。しかし確実に清洲城や駿府城と年代が同じであり、

かつ下駄の時代的性格を表すに足りる数量を出土する報告例は、管見の限り存在しないのである。東海地域における長楕円型の発祥地については、今回同地域同時代の下駄に関する清洲城下町遺跡と駿府城以外の資料を集め得ず、検証できなかった。しかし駿府城より清洲城下町遺跡において先行して長楕円型が出現していることから、清洲城周辺地域を中心とした東海地域に発祥地を推定することが現状では妥当であろう。

関東への流入の時期は、長楕円型が出土しない鎌倉若宮大路遺跡群、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第IV地点と出土する東京駅八重洲北口遺跡、丸の内三丁目遺跡五二号土坑の年代を考慮すると、一五九〇年代と判断できる。東京駅八重洲北口遺跡以降の江戸遺跡において長楕円型下駄が爆発的に出土し、鎌倉若宮大路遺跡群、葛西城、小田原城欄干橋町遺跡第IV地点などに見られる中世以来の在地下駄の組成が大きく変化したことを考慮すると、一五九〇〜一六〇五年の間に江戸の在地文化に強い衝撃を与えた歴史的な事件は一五九〇年の徳川家康の江戸入府しか存在せず、したがって、すでに東海地域において主流を占めていた長楕円型の下駄が家康の江戸入府とともに関東へ流入したものと判断できるのである。これを江戸極初期における下駄の変容原因の一つとして捉えたい。

東京駅八重洲北口遺跡出土の下駄は、東海地域から流入した長楕円型よりも中世以来の系譜を受け継ぐ小判型、隅丸型、角型が依然主流を占めていることから、家康が江戸へ入府して間もない頃と考えられる。丸の内三丁目遺跡五二号土坑の時期になると、連齒下駄、露卯下駄、削り下駄に揃って長楕円型が見られることから、東海式の長楕円型が定着していると判断される。また東京駅八重洲北口遺跡に比べて大きさや形状がほぼ揃い、規格化されている様子が見られることから、長楕円型に限らず、下駄全体の生産体制が確立していた様子も見て取れる。東京駅八重洲北口遺跡と丸の内三丁目遺跡五二号土坑出土下駄の様相が異なるのは製作技術の安定化が大きく寄与していると考えられ、先に宮本馨太郎氏が主張した意見に全く沿うものである。これを第二の変容原因として考えるものである。

家康が入府した時、製品としての長楕円型下駄ばかりでなく、その下駄を作る工人達も同時に関東に至ったと考えられる。なぜなら露卯下駄を中心とした長楕円型下駄は家康入府以後、半世紀を経た丸の内一丁目遺跡二四〇号遺構においても継続して大量に出土しており、単に東海地域から製品が持ち込まれていただけではとても需要に応じきれなかったとは考え難いからである。家康と一緒に江戸へ下つた工人が江戸で新たに弟子を育て、彼らが東海式の長楕円

型下駄を生産し続け、それが丸の内三丁目遺跡五二号土坑の時期に製作技術の安定化した結果、形状の統一された下駄として現れたのではないだろうか。また丸の内三丁目遺跡五二号土坑と東京駅八重洲北口遺跡で出土した隅丸型下駄で後部に長楕円型の特徴を有し、いわば両型の中間的性格の図6-2・11・13、図7-8は、東海地域から来た工人に技術を学んだか、もしくは影響を受けた在地出身の工人によって在来下駄の特徴を残しつつ作られた可能性もある。

当然、江戸時代を通じて東海地域で生産された長楕円型下駄が絶えず江戸に供給されていた可能性も否定できない。しかしこの問題は、考古学だけではなく、文献史学の側面からの検証も必要であろう。

稿初において江戸時代を通じて多種多様な形状の下駄が出現し、その種類は膨大なものになると述べた。今回江戸極初期における東海地域の下駄の江戸への流入を考えた時、そうした多種多様な下駄の出現要因の一つが他地域からの江戸への流入ではないかと思われてきた。この点についても、江戸と他地域双方の下駄について検証する必要があるものと考ええる。

江戸極初期における下駄の変容(今野)

注

(1) 古泉氏による分類は非常に完成度が高いため、現在においても頻繁に用いられている。しかし提唱から既に四半世紀を経ており、その間に多くの事例が追加されている。そこで筆者は、今後の研究方針を模索するため、敢えて新しい分類概念を提唱した。また新たに採用した名称は、視覚的に形状上の特徴を理解しやすくすることを狙ったものである。

(2) 事例としてあげた各遺跡出土の下駄の観察表は敢えて掲載しなかった。その理由は、土中での変形や出土後の保存環境によって大きさは変化するため、数値上の比較はかえって正確さを欠くと考えたからである。本稿ではむしろ下駄の平面形を中心に論を進め、大きさに重点をおいての検証は行う意図がない。また樹種については、全ての調査において同定を行っているわけではないので、統一性を持たせるために割愛した。

引用・参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 一九九二『清洲城下町遺跡(Ⅱ)』  
愛知県埋蔵文化財センター  
赤星直忠 一九七一「鎌倉出土の下駄資料」『貝塚』六一〜三頁  
市田京子 一九九二「江戸時代の下駄」江戸遺跡研究会第五回大会  
市田京子 二〇〇〇「江戸時代の下駄」『江戸文化の考古学』所収 江戸遺跡研究会  
潮田鉄雄 一九八〇「評論 古泉弘・江戸の出土下駄(物質文化三二)」『貝塚』二五 一〇〜一六頁

小田原市教育委員会 一九九八『小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅳ地点』小田原市教育委員会

葛飾区遺跡調査会 二〇〇一『葛西城Ⅹ』葛飾区遺跡調査会

葛西城址調査会 一九七四『青戸・葛西城址調査報告Ⅱ』葛西城址調査会

葛西城址調査会 一九七五『青戸・葛西城址調査報告Ⅱ』葛西城址調査会

葛西城址調査会 一九七六『青戸・葛西城址Ⅱ区調査報告』葛西城址調査会

葛西城址調査会 一九八三『葛西城』葛西城址調査会

葛飾区遺跡調査会 一九八九『葛西城Ⅺ』葛飾区遺跡調査会

岸上興一郎 一九六九「露卵下駄」『貝塚』三 表紙裏

古泉弘 一九七九「江戸の出土下駄」『物質文化』三二 一〇〜二九頁

古泉弘 一九八二「江戸の出土下駄に関する補足」『貝塚』二九 一〜五頁

古泉弘 一九八三『江戸を掘る』所収 柏書房

古泉弘 二〇〇二『地下からあらわれた江戸』所収 教育出版

宍戸武昭 一九七四「露卵下駄」『貝塚』一三 表紙裏

静岡市教育委員会 一九九八「駿府城跡Ⅰ」静岡市教育委員会

高瀬保 一九六九「越中・小出出土の露卵の下駄」『史苑』二九 六八〜七一頁

千代田区丸の内一・四〇遺跡調査会 一九九八『丸の内一丁目遺跡』千代田区丸の内一・四〇遺跡調査会

東京駅八重洲北口遺跡調査会 二〇〇三『東京駅八重洲北口遺跡』東京駅八重洲北口遺跡調査会

東京都生活文化局 一九九四『丸の内三丁目遺跡』東京都生活

文化局

- 都内遺跡調査会 一九九六『溜池遺跡』都内遺跡調査会  
都内遺跡調査会 二〇〇〇『小石川牛天神下』都内遺跡調査会  
都立一橋高校内遺跡調査団 一九七六『江戸』都立一橋高校内  
遺跡調査団  
宮本馨太郎 一九六一「露卯下駄の終焉」『史苑』二二二 三七～  
五一頁  
宮本馨太郎 一九六三「露卯下駄の大きさ」『物質文化』一六  
九～八二頁  
若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 一九九九『若宮大路周辺遺跡  
群』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

(國學院大學特別研究員)